

黄瀛こらえいという詩人を知っていますか。大正末期から昭和初期に、日本詩壇を彗星のように駆け抜けた重慶生れの中国人。まずは、十八歳の時の初期詩篇「七月の情熱」を見てみよう。

白いパラソルのかげから

私は美しい神戸のアヒノコを見た

すつきりした姿で

何だか露にぬれた百合の花のやうに

涙ぐましい処女を見た

父が——

母が——

その中に生れた美しいアヒノコの娘

そのアヒノコの美しさがかなしかった

あゝ、私はコールテンのズボンをならし乍ら

その美しい楚々たる姿に

パナマハットの風を追はうとした

彼女の白いパラソルの影で

その美しい眼と唇に

聖い接吻を与へようと

ふと途上のプラタナスの下で

七月の情熱を高めてしまった

一九二五(大正一四)年十月、同人雑誌『朝』所収

悪名高い「治安維持法」の成立した同年、黄瀛こらえいは、中央詩壇の登竜門の月刊誌『日本詩人』

二月号で、「朝の展望」が第一席に選ばれ、すでに詩人としての名声を得ていた。「黄瀛君

の詩は、第二新人号で桂冠詩人に推薦された時から、私の注意しているものである。黄君の情操は、気質的に軽快で明るく、それに貴公子風でもある。君は好い意味での気質的健

康性を有している。……」(「日本詩人九月号月旦」と、萩原朔太郎は絶賛している。彼

の健やで、伸びやかな表現力と語韻の音楽性は、天賦の資質と云えるものかもしれない。遺

紙面の都合上省略するが、「喫茶店金水」という詩でも、その瀟洒で独特なリズム感は、遺